



Title	Per Olof Sundman 『ソーム物語』に関する考察：中世アイスランド作品『<フレイ神ゴジ>フラヴァンケルのサガ』の現代“翻案”にみる女性群像を中心に
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 1990, 9, p. 3-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Per Olof Sundman 『ソーム物語』

に關する一考察

—中世アイスランド作品『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』の現代“翻案”にみる女性群像を中心に—

菅 原 邦 城

1. はじめに

スウェーデンの作家 Per Olof Sundman (1922-) が13年前に出した小説『ソーム物語』(*Berättelsen om Såm.* 1977) は不思議な作品だ。筆者はこれを初めて読んだとき軽い酩酊感さえ覚えた。この小説は、中世アイスランド散文文学のなかでも傑作と定評のある短編サガ『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』(*Hrafnkels saga Freysgoða*) を、アイスランドという地名を一度も挙げないまま、明らかに20世紀後半のアイスランドに舞台を移して“再話”したものである。小説の中で主人公たちの物質生活は現代そのものであるのに対して、その社会制度と倫理観は中世サガ世界のもの、つまり古代から継承された古ゲルマン・北欧的なものとなっている。この二つの相異なる時代の巧妙な並立——むしろ、相互分離か——を試みたアイデアと文学技法が、読む者に言うに言われぬ独特の印象を与えるのであろう。

中世と現代の“文学”はそれぞれの本質を同一レベルで論じることは戒めねばならないが、見方次第では、Sundman はサガの内容を文字通りすべて取り込み、それを深め豊かにすることによって“サガの現代小説化”に成功したと言えるかもしれない。末尾の文献リストからも明らかなように、小説の長さはおよそサガの5倍に

なっているが、Sundman の物語展開のテンポはサガのそれに劣らず軽快・急速であり、決して弛緩することがない。文章に関しては、主題の性格のため説明を余儀なくされる個所では詳しくなっているものの、全般的に簡明直截、しかし同時に、雄弁にして説得力がある。この勝れてサガ的なテクニックは、彼の文体の大きな特徴として知られているものである (cf. Eriksson et al. : 307ff.; Olssson & Algulin : 519; Lönnroth & Göransson : 85)。

サガと Sundman の小説を、一方を念頭に置きながら他方を読んでいると、さまざまな観点からいろいろな考えが生じる。しかし本論では、紙幅の都合上、筆者の心にもっとも強く残った、作品中に登場する女性たちの役割を取り上げ、その意義を分析し考察してみたい。

なお、“北国の作家” (Warne のサブタイトル) と称される Sundman は首都ストックホルム郊外に生まれ育ち、その後20代後半から40才過ぎまで北部地方 (Jämtland 州の観光地 Jormlien) でホテルを経営していた。その間1957年に作家としてデビューし、1967年から80年までは地方議会議員、ついで国会議員を務め、さらに75年にはスウェーデン・アカデミー会員に推挙されて今日に至っている。

2. 『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』 梗概

本節では、Sundman の小説『ソーム物語』の前提となっている散文作品を、その粗筋をたどりながら比較的詳しく紹介する。(詳細は、例えば 山室；菅原 の邦訳につかれたい。) ちなみに、このサガは13世紀後期にまとめられた作品で、サガ文学の通例としてその作者の名前は不明である。なお、『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』は、現在まで『〈蛇舌〉 グンラウグのサガ』と並んでもつとも刊行回数が多く、アイスランド人がいかにこのサガを好んでいるかが分かる (cf. Kristjánsson : 250)。

ノルウェーを統一したハラルド美髪王 (在位 c. 890–c. 940)

の時代に Hallfreðr という男が妻と息子 Hrafnkell を連れてアイスランド東部に移住して来た。息子は独立して Aðalból に住み、Oddbjorg を妻に迎え、2人の息子 Þórir, Ásbjörn をもうけた。「彼は自分の家人には親切で思いやりがあったが、ヨクルスダル住民には厳しくて思いやりがなかった。Hrafnkell はしばしば決闘をしたが、だれにも補償を支払わない。そのため、彼がなにをしようとも、彼からなんらかの償いをとった者は一人としていなかった。」(2章)。彼は父祖の神々のうち、とりわけ豊穰と生産の男神 Freyr をもっとも崇拜して、Freysgoði “フレイのゴジ”とあだ名された(goði とは本来異教の祭司を意味したが、アイスランド建国時にはすでに、地域の制度化された豪族、首長を意味するようになっていた)。彼はこの上もない宝として種馬 Freyfaxi (“フレイのたてがみ”の意)を所有していたが、「彼は友なるフレイに、この馬を半分捧げていた。この馬に Hrafnkell は非常な愛情を抱いていて、彼の意思に反してこの馬に乗った者は必ず殺すという誓いを立てていた。」Hrafnkell が支配する地域に Bjarni という農民がいて、彼にも妻と二人の息子があった。一人は Sámr、もう一人は Eyvindr といった。兄は結婚して、Leikskálar という屋敷に住み、財産家だった。「Sámr はきわめて傲慢ながら法律に詳しい人物だった。」(3章)。Eyvindr は通商人となってノルウェーへ、次いで東ローマへと向かった。Aðalból に近い農場 Hóli には Bjarni の弟 Þorþjörn が住んでいた。彼は、貧乏人の子沢山で、長男 Einarr に奉公に出ることを求める。息子は Hrafnkell のもとで羊番の仕事にありついた。ゴジの唯一の条件——『おまえに一つ警告しておく。たとえどんなに大変な必要が迫っていても、Freyfaxi だけには絶対乗ってくれるな。それというのも、わしはこのことで、あの馬に乗った者は殺すと堅く誓っているからだ』(4章)。

Einarr は山の夏季放牧場 (setr) で順調に仕事をしていたが、あるとき30頭ばかりの羊がいなくなり、1週間も捜し当てられなかつた。ある雨の朝はやく、Einarr は他の馬が怖じ気づいてどうしても乗せないので、おとなしい Freyfaxi に乗ってしまう。その馬のお陰で明け方から夕方まで広く捜し回ることができて、行方不明の羊たちを発見して囲いに追い返す。一方、Freyfaxi は羊番をおろすと、一目散に Hrafnkell がいる Aðalból に駆け下りてゆく。それを夕食の給仕をしていた女中が認めて主人に知らせる。明くる朝 Hrafnkell は放牧場に上がって行き、「厳肅な誓いを破ってわが身に呪いを招く人間には碌なことは起こらないという信念から、彼は馬から羊番のまえに跳び降りてこれに死の一撃を浴びせた。」(6章)。父 Þorbjörn は、息子殺害さるの知らせにひどく悲しむ。そして Hrafnkell に償いを求めた。しかし、首領は言う、『わしがどんな人間にも補償を払うつもりのないのをおまえだって知らぬことはあるまい。それでもみんなは、ことがそう処理されるのを我慢せざるを得んのだ。だがな、それは言うものの、今度わしがやったことはこれまでしてきた人殺しのなかでは相當によくないものだと自分でも思っている』。そして、気前のいい経済的な援助と子供たちへの後援を申し出て、それで和解とするよう Þorbjörn に求める。しかし後者はこれを拒んで言う、『わしは、あんたとの間に他の人を立てたらいいと思います』。Hrafnkell——『つまり、おまえは自分がわしと対等だと思うわけだ。ならば、わしたちはそんなふうには和解できんぞ』(7章)。Þorbjörn は兄 Bjarni に裁判の助力を依頼したものの、にべもなく断られる。しかし、甥 Sámr を首尾よく説得して訴訟を引受けさせた。法律に精通している Sámr は必要な準備を進める。

裁判が開かれることになる、翌夏のアイスランド全島集会 (Alþingi) で Sámr と Þorbjörn は、勝訴に不可欠な首領たちの支持

と援助を得ようと奔走するが、みんなに拒絶される。しかし翌朝、二人は首領の援助を獲得することに成功する。それはアイスランド西部の Þjóstarr の2人の息子 Porkell と Þorgeirr からで、彼ら兄弟は70名の手勢を率いていた。いよいよ裁判が開始されて、Sámr は「ただちに証人の名を呼び挙げ、正当な国法にのっとって訴訟上の手落ちもなく堂々と Hrafnkell goði に対する訴えを起こした。この後、Þjóstarr の息子たちが味方の大群を従えて現れる。西部地方の住民はみな彼らを支持した。」裁判はとどろきなく進行して、原告が被告に弁明を要求する。ところが、Hrafnkell は相手を侮って、裁判の場に臨むことさえ怠っていた。彼のもとに人が走ったときにはすでに時おそく、Sámr の支持者たちに阻まれて、自分が訴えられている裁判を聴くことすら出来なかった。「一方、Sámr は法が許すぎりぎりの範囲まで裁判を進めて、ついに Hrafnkell をこの集会で完全追放にした。」(11章)。Hrafnkell はすぐに集会から帰宅して、何事もなかったかのように暮らす。Sámr は裁判の結果に大いに満足していた。しかし当時の法律では、Porkell が言うように、『財産没収裁判が行われないかぎり、あいつは完全追放になっていない。この裁判は、あいつの法的住所で行われなければならぬのだ。これは集会解散後14日目と定められている』(12章)。そうして、兄弟は Sámr に援助を申し出る。財産没収裁判の当日朝はやく、Sámr と Porkell は80人を率いて、まだ眠っている Aðalból を急襲する。彼らは Hrafnkell と武器を使える男たちを前庭に引きずり出し、彼らの脚の腱に穴を開けてロープを突き通し、物干し竿に逆さ吊りにする。それから、法で定められた場所と時刻に財産没収裁判を執行する。裁判の後 Sámr が言う、『Hrafnkell、あんたに次の二つから一つを選ばせよう。一つは私の望む連中とあんた自身をこの屋敷から連れ出すこと。もう一つはあんたが殺されることだ』。Hrafnkell が答える、『こんな不面目よりも即座

の死の方がましたと思う人も多いだろうが、わしにとっても他の多くの者にとってと同様、許されるならば生きる方を選ぶことにするだろう。そうするのは、何よりも一番わしの息子たちのためなのだ』。それから Hrafnkell は、Aðalból とゴジ権に今後決して権利を主張しないと約束させられて僅かばかりの財産を与えられ、家の者を連れてこの地域から出ていった。Porkell が Sámr に言う、『あんたがどうしてこんなふうにするのか、わしには分からん。やつの命を助けたことを、誰よりもあんた自身がいちばん後悔するだろう』(13章)。こうして、Sámr は Hrafnkell の後を襲って地区のゴジになるが、「Þjóstarr の息子たちは Sámr に、自分の部下に対して親切で気前よくあれ、役に立つ者となれ、誰であれ彼を必要とする者の援助者になれ」と忠告した。(15章)。Porkell たちは、この殺人事件の発端となった馬 Freyfaxi を殺し、Freyr を祀った神所を焼き落として、西部地方に帰って行く。長男を殺された老人 Þorbjörn は Sámr の旧居に住まわせられる。一方、Hrafnkell は新しい地区で次第に財産と権力を大きくしてゆき、やがてかつてをしのぐ勢力の首領になる。「いまや Hrafnkell の性格に変化が生じていた。以前よりもはるかに人に好かれるようになった。彼は人助けと気前のよさでは同じ気持ちをなくさずにいたが、その上、あらゆる点で以前よりも人気を得、穏やかで優しかった。」(16章)。

こうして、全島集会裁判から丸 6 年の歳月が過ぎて、ふたたび 7 年目の夏がめぐって来る。この夏、Sámr の弟 Eyvindr が 7 年の外国滞在の間に「諸芸に精通し、また非常に勇敢な男になり」船長となって帰国する。そして Sámr と Hrafnkell との係争について聞かされても、「彼はそれをあまり気にかけなかった。彼は出しゃばりな人間ではなかった。」(17章)。Sámr が船にやって来て弟を Aðalból に招待して一旦帰宅し、迎えの馬を差し向けて。Eyvindr の一行は総勢 6 名からなり、やがて早朝に Hrafnkell 屋敷近くの浅瀬

を渡って行く。それを洗濯に来ていた屋敷の女中が目撃して、主人に注進におよぶ。それに煽られて、Hrafnkell は別の女中を使いにやって急きょ手勢に招集をかけ、18人で Eyvindr 一行を追跡する。後者がぬかる湿地で手間どっている間に、Hrafnkell の一団が姿を現した。それを知らされた Eyvindr は、Hrafnkell から逃げねばならない心当りなどないと答える——『この連中が誰なのか分からぬからだ。わしが全然調べもしないで逃げたりしたなら、多くの人に物笑いの種だと思われるだろう』。さらに、『このわしが害を与えたこともない者たちから逃げてなるものか』。短い決戦が始まり、「Hrafnkell は Eyvindr に一言もことばをかけず、ただちに攻撃をかけた。Eyvindr はよく男らしく防いだ」(18章)が、多勢に無勢で Eyvindr 側は、Sámr のもとに知らせに走った少年を除いて全員が命を落とす。急報に Sámr が戦いの場に駆けつけたときには、仇敵はすでに遠くにあり、深追いはかえって危険と判断、彼はひとまず弟たちの亡骸を葬って Aðalból に帰った。Sámr は、翌朝はやく弟の仇を討つべく部下に招集をかけて、その夜は床に就く。一方 Hrafnkell は、帰宅後ふたたび準備をし、その夜のうちに Sámr の寝込みを襲った。ここに立場は逆転、6 年前の Aðalból の場面が再現された。Hrafnkell が言う、『Sámr よ、おまえの今の様子は、つい先ほどまではありそうもないと思っていたかもしれない有り様で、今度はわしがおまえの命を思いどおりにできるんだぞ。だが、おまえに対して、おまえがわしにしてくれたより酷いことをする男にはならないでおこう。おまえに二つから一つを選ばせよう。一つは殺されること。もう一つはわしだけが二人の間を判断、裁定するというものだ』。当然ながら、Sámr は命を選ぶ。そして、Aðalból を手に入れたとき持つて来た財産だけを与えられて、もとの屋敷に追われる。Hrafnkell —『おまえが Leikskálar に住むのは我慢してやる。そして、おまえが身の破滅を引き起こすほど高慢にしなけ

れば、それで十分だ。わしとおまえが二人とも生きている間は、おまえはわしの部下になるのだ。わたしがこれ以上争うことがあれば、それだけ一層まずいことになると肝に銘じておけ』(19章)。

冬も終わる頃、Sámr ははるばると西部地方に Þjóstarr の息子たちを訪ねて、ふたたび援助と支持を懇願する。Þorgeirr——『わたしあなたは、Hrafnkell の命を取れと勧めたのに、あんたは我を張った。やつがあんたを安穩に暮らさせておいて、あんたよりも優れていると思った男を片付けられる機会をまっさきに狙ったからには、あんたたち二人の頭の違いがどんなものか、たやすく見てとれる。わたしたちはあんたのこの不運と関わりを持つことはできない。わたしたちの名誉をたびたび危うくしてまで、Hrafnkell と争うことを望む気持ちもない』(20章)。その後、Sámr は老齢に達するまで Leikskálar に住み、Hrafnkell に刃向かうことはできなかった。Hrafnkell は権勢家の人生を全うし、二人の息子も成長して大人物と目されるようになる。

3. 『ソーム物語』の成立について

Sundman の小説の表紙カバーには、作者自身によるこの小説執筆のいきさつを語る文章が載っている。それによれば、作者は『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』の主人公を、ふつう言われるよに Hrafnkell 一人だけとは解釈せず、Sámr を二人目の主人公と考えて、そのテレビ映画化のアイデアをかなり以前から暖めていた。そのため作者は自ら、サガに語られているアイスランドの各地をジープを駆って踏破した。「映画化するサガの素材は時代を現代に設定しなければならないということが、私には明らかになっていた……私は物語を現代に“翻訳”しなければならなかった。私は映画のシナリオを書き始めた——しかし、その結果は小説になった。」「この小説は現代を舞台にしている——しかし、完全に現代

というわけではない。私の風景はアイスランド的だが、アイスランドそのものではない。Ravnkel と Sám の間の葛藤を特徴づける複雑な法律上の諸規則は、千年前のアイスランド共和国の一現実である。それらは今日でも、西欧的な特徴をもつ体系化のなかに辛うじて隠蔽されて、他の諸国にも存在している。」

「私の小説は一つの解釈である」と断言する Sundman は、この700年前の“短編小説”（novell）の解釈にあたって、ストーリーを膨らますために、男女の新しい人物たちを創造しなければならなかつた。「とりわけ重要なのは、女性たちが果たしている役割を強調することである」と作者が注意を促しているように、女性たちの叙述がきわだつている。（なお、本稿では言及する余地がないが、詩人 Geir, Ravnkel の使用人頭 Olof 等注目すべき男性たちも作者の創造物で、もともとのサガには見出せない人物たちである。）

4. 『ソーム物語』の主人公二人のプロフィール

『ソーム物語』のストーリーは、作者 Sundman 自身が述べているように、また両作を読めば明らかのように、粗筋は改めて詳述する必要のないほどサガのそれに“忠実”である。しかしながら、スウェーデン人作家の“サガの現代小説化”技法の端的な例として、ここで取り上げる女性たちとともに関わる主人公二人を紹介しておきたい（以下では、Ravnkel [= サガの Hrafnkell] は R, Sám [= Sámr] は S と略す）。

「Rは十分な教育を受けていた。父 Hallfred によってスコットランドとスウェーデンの農業学校に留学させられた……彼は家畜の飼育に熱心で、種牛は外国から購入していた。」（原作の p. 10）。Rは畜産、酪農、養鶏を大規模に行うばかりでなく、Adalbol に属する広い荒地を開墾して耕地に転じ、また温泉から熱湯を引いたガラスの温室で各種の野菜とともにブドウ、メロン、バナナを栽培し

た。「彼は農民であるだけではなかった。彼はまた技術者であり、博識な経済専門家でもあった。」(p. 11)。しかし、「Rは飲み過ぎ」て (pp. 25f., 132), 「彼はグラスに注ぐとき少し手が震えた。」(p. 20)。大方の仕事人間の例にもれず, Rも酒なしの日々は考えられなくなっている。そして,『女なしじゃ, 人生なんてあんたにはきっと我慢できないわ。女がいなかったら, あんたはどうなっていたかしら?』(p. 211)と若い愛人に皮肉を言われているように、女好きでもあった。しかし、『あのひとはいつも少し芝居をしているの——あのひとは遊んでいる。でも、あのひとは本気でお芝居をして、遊んでるんだわ』(p. 41)という彼女のことばが正しければ、Rは本質的にはまじめな人間に違いない。そして、Rが17才の Einar を殺した初夏に、彼は男盛りの38才になっていた。

一方、Rより2才若いSは「理屈好きの頭をしていた。彼は首都の大学で文学史と法学を勉強した……彼はRの谷に戻り、借錢して Leikskálar 農場を買った。彼は博識で企業心も旺盛であり、Rが有していた性格の多くが彼にもあった。」(p. 13)。具体的には、「農業のことをよく知っていた。だれでも、彼は有能な農民だと言うほかない。彼は新しい考え方や新しい農耕法というものに抵抗はなく、それらに注意を怠らなかった。」(p. 174)。また、「Sは雄弁のことば数が多かった。」(p. 13)。(同じ p. 13 で S の弟 Eyvind が紹介されているので、対比のために引用しておこう。「Eyvind はことば数が少なかった。彼は雄弁な人々に耳を傾けたが、自分の意見は言わなかった。黙ったまま自分の思いどおりにした。彼はコペンハーゲンで経済学を学び、イェーテボリとトロンヘイムで工学修士になった。彼はドイツの企業に就職した。そして彼は、ちょうどこの年、Rが Einar を殺す一週間あまり前にインドに赴いた。」このように、Eyvind もサガの Eyvindr と同様に、完全に兄たちの争いの圈外にあった。)「Rは Einar を殺した。Sは争いを望まな

かった。彼は強いられたのだ。なにしろ Einar は彼の叔父の息子だったから。」(p. 14)。その叔父 Torbjörn [=þorbjörn] が S の父から援助を断られて自分のもとに来ると、彼も最初は父と同じく、叔父が R の気前のよい償いを拒絶したことを批判する。しかし最終的には、気の毒な老人に同情する妻の積極さに押し切られる形で、叔父の訴訟を引き受けることを承諾した——「Rに対する訴訟を引き受ける決定を S のためにしたのは Torbjörn ではない。彼の妻 Åslög だ。」(p. 163)。S が周囲に強いられて行動を起こす傾向をもっていたことは、Rに対する財産没収裁判との関連でも語られる——「彼が現在の所にいるのは、自分自身の努力によってではなかっただ。彼にそうするように強いたのは、彼の手勢と Torkel [=þorkell] だった。」(p. 145)。周りの者のことばに過敏なまでに反応する S なのに、彼が決定的な助言に従わなかったことが、2 度語られている。一度目は、サガにおける展開と同じく、S が R に命を与えてしまった時である——彼が 6 年後に、「R は自分のした約束と握手に背いた」(p. 228) と愚痴ってみても、所詮お人好しの負け犬の遠吠えとしか聞こえない（これと対照的に、R が『いつわしが Eyvind を生かしておくと約束したというのか！』(p. 232) とうそぶき、『自分のした約束を破ることができるのは強い人間だけだ』(p. 237) と言い放つ鉄面皮ぶりは、弱肉強食の社会に生きる読者には強い説得力をもって迫る）。二度目の場合は Sundman のフィクションである。それは、S が弟の復讐のため手勢を屋敷に集めながら出発を翌朝に延ばした夜に、妻の強い勧めに従わなかったことである——『S、あなたは素早く行動しないとだめです。これはあなたの最後か、あるいは R の最後になるのですよ』(p. 229)。Tjostarr [=þjóstarr] の息子たちや詩人 Geir が強く勧めたように R を殺していたら、首領 S には後顧の憂いはなかったはずである。後悔先に立たずとしても、せめて、無念の横死を強いられたただ一人の兄弟に対する

る最近親としての義務と、自分自身の名誉のために、考え得る最良の方策を即刻とらねばならない——これは取りもなおさず、主人公たちが生きている社会の倫理が自由人に課する最善の徳目なのだから。Torkel は言う、『小物は年月が経ってもめったに大物になれない』(p. 253)。強者の論理が撻となっている社会では、常識人 S 自身が言わされているように、『穏やかな性質はおれの人生の禍いのもとだ』(p. 243) ろうことは、大いにあり得る。

5. 『ソーム物語』の女性たち

すでにサガ文学に多少なりと通じている向きには改めて説明するまでもない特徴だが、一般的にサガは人名と地名を実に多く含む。固有名詞にあふれていると言っても、あながち誇張ではない。その中で、『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』は中編としても非常に少数の人名しか出てこないので、大昔のなじみの薄い数多くの名前に辟易しかねない現代の読者にも、スムーズにストーリーの展開が追える、有り難い作品である。

さて、『フラヴァンケルのサガ』の作中人物の間で、女性の影はまったく薄く、わずかに洗濯をする Hrafnkell の女中だけが目立つ程度である。§ 2 で詳しくまとめた梗概には、サガの中に認められる女性たちは、山の放牧場で働く普通名詞で言及されている「乳搾りの女たち」を別にすれば、全員取り上げられている。そのうち Hrafnkell 側に属するのは妻 Oddbjorg, 無名の給仕女, 無名の洗濯女, 無名の使い走りの女中である (Hrafnkell の母は無視してよからう)。一方, Sámr 側の女性たちは彼自身の妻と、父 Bjarni の妻で、いずれも無名のままである。このように女性が具体的な名前で言及されないこともあって、このサガは一見“男の物語”となっている。それを、サガには見当らない多くの女性たちを登場させることによって、かなりの程度まで“女の物語”に仕立て上げたのは

Sundman の独創である。こうして、彼が特別な役割を割り振っている女性たちは、以下の通りである。

R の世帯に属する女性たちとしては、まず妻 Oddbjörg (息子たち Tore と Åsbjörn の母でもある)、使用人頭の娘で R の愛人 Åsa、年配の使用人 Gudrun がいる。一方、S の周辺にいる女性たちは、彼の妻 Åslög、彼の父 Bjarne [= Bjarni] の妻（もちろん S と Eyvind の母でもあるが、小説の中では主婦的役割が強い）、そして Einar の母（もちろん Torbjörn の妻でもあるが、明らかに母としての性格が勝っている）である。

6.1. 女性の諸タイプ

言うまでもないが、『ソーム物語』の人物たちは他のすべてのフィクションにおけるのと同様に、作者の必要に従って、またそれによって限定さる特定の性格づけをなされ、行動する。しかし、この小説は“翻訳”だとする作者の出発点から、主人公をはじめすでにサガの中で名前を挙げて描写されている人物たちは事実上、サガの中で彼らの行動とされているものと本質的に、あるいは著しく異なる振舞いをすることは困難になっている。しかしながら、この制約は、前述の洗濯女を別にすれば、Sundman の小説の女性たちには及ばない。その結果、彼女たちは作者の想像力がもっとも發揮された人物像になっているはずである。ここでは、彼女たちを幾つかのタイプに分類して、テキストに添いながらその意義を考察してみたい。

6.2. 母としての女性：Einar の母

『ソーム物語』の中で Torbjörn の妻は、ただひとり母親の性格をもっぱらにしている。彼女の夫は、次のように導入される。「Hol には Torbjörn が住み、すでに年をとっていた。彼は子供をたくさん持っていた。長男は Einar という名前だったが、R が殺したの

はこの Einar だ。Torbjörn の人生はうまくいかなかった。Hol は小規模の農家にすぎなかつた。」(p. 12)。彼の妻は17才の息子に語る。『わたしはおまえを見るのが好きです。おまえは賢くて、まるでもう大人になったみたいな話し方をするんだから』(p. 16)。しかし、息子の顔にはまだ子供らしさが残っていた。『おまえを嫌う人なんかいません。それでも、おまえはとても優しくて親切で、だれにでもよかれと思ってしてやるから、この世ではきっとうまくいかないね』(p. 17)。

ここに見られるのは、夫にはもはや完全に期待できなくなってしまった分だけ長男に望みを託す女性である。彼女は同時に、わが子の将来に必ずや待ちうけているに違いない困難を直感して、不安を抱いている。この不安は、息子がRと奉公の約束をし、人生最初の火酒に酔って深夜に帰宅したとき、ほぼ確信に変わる。

「そうして彼は母親と視線が合う。『かあさんが泣いている！なぜ泣くの？ その涙は今晚よりか、もっと必要になるときまでとっておいてくれよ』

『わしは取るに足りない男だし、もう歳だ』と Torbjörn が言う、『自分のあばら屋の台所の屋根を塗り直す金さえない』

それから Torbjörn は沈黙する。Einar は台所のベンチで寝込み、猫が彼の胸の中で頭を彼のあごの下にいれてよく眠っている。

『わたしたち、息子を一人なくしてしまったんですね』と Einar の母は言う。」(pp. 31-32)。

息子 Einar の死を知らされると、Torbjörn はすぐに台所の妻に伝える。「彼女は手に卵を二つ持っていた。卵がこわれた、黄身は床に流れ、自身はべとっとした糸みたいに彼女の指から垂れ下がった。」(p. 68)。

「あとで、夜になってから彼女は言った、

『わたしは生まれてから一度だって、憎しみなんて感じたことはあ

りませんでした。でも、今はちがいます。あんたは何をしようと思っているんですか？ Rはどれだけ力がある人なんですか？ あんたはどれだけつまらない“けちな”人だというんですか？ Einar はもう土のなかに転がってるんですよ。あんたは何をしようと思ってるんですか？ あんたは黙って横になっていなさる。眠ってなんかおりません。あんたはそんなにもつまらない“けちな”人だから自分では決心できない、ほんとにそうなんですか？」（p. 69）。

このように、母親はあまりに早い息子の死に、悲しみと怒りを同時に爆発させる。無力な父親 Torbjörn とて、悲憤に猛ける妻から挑発されるまでもなく、長男を虫けらのように殺した首領に対する憎悪、否、敵意を心の中で増大させて復讐を誓う。それを聞くと、「Einar の母はじきに眠りに落ちた。」（p. 70）。殺された息子の父である夫に復讐を約束させることができて、彼女の役割は終わる。（小説の最終章にふたたび、老婆となった彼女の姿が認められる。）

『ソーム物語』には、Einar の母の他にも、子供を持った女性は登場する。しかし彼女たちは、例えば R 夫婦の場合のように、「彼らは息子を二人持っていた。」（p. 12）という事実の報告以上には語られない。R の妻 Oddbjörg が母親として描写されることが少なかったのは、本節冒頭に述べたように、常識的すぎる理解ではあるが、Einar の母と同様に（また、すべての作中人物たちと同様に）、作家が個々の人物にそれぞれ独自の役割を分担させたためであろう。

6.3. 妻・女主人（主婦）としての女性：Åslög 対 Oddbjörg

Einar が殺された夏、R は38才だったが、妻 Oddbjörg は「彼よりも5才若かった。彼女は金髪で、青い目をして、ほっそりした腰をしていた。」（p. 12）。そして「古い農民一族の出だった。」（p. 55）。彼女は、いかにも野心家の有力者が妻に求める女性の条件を備えている。ことに強力な姻戚をもつことは、行政と司法の体

制が整っておらず、個人の実力がすべてを決した中世アイスランド的社會では、他のなににもまして強い潜在力なのである。

小農の小作 Einar は、5月の晴れた日曜日に Adalbol に仕事を求めて現れる。明るい季節になったためだろう、R夫婦はきさくに若者をもてなす。そして、10才ほどの長男もいる Oddbjörg は若い Einar の頭、首、背中などにさわって異常な関心を露骨にする——かたわらの草原には夫が仰向けに寝転んでいる！（「彼は飲み過ぎてしまった。彼は目を半ば閉じ、半ば開いている。彼は眠ってはない。」(p. 26))。案の定、山の放牧場に滞在していた一夜、彼女は Einar が横になっていた小屋に忍びこんできて言う、『おまえは、私のところに来る度胸なんかありません。だから私がおまえのところに来てやったのよ』(p. 58)。

また別の夜、Oddbjörg はふたたび羊番の寝床の中にいた。そのとき、夫の若い愛人 Åsa から、『奥さんがあたしよりかもっと Einar に色事を教えられるのは確かですけど』と、恨みのことばを投げつけられる。Åsa も同じ魂胆で、白夜の中を屋敷から上がって来たのだった。

Oddbjörg の女主人という立場を利用した Einar 誘惑は、単なる火遊びなのだろうか。§ 6.4 で詳しく見るところから、確実に夫側に原因がある欲求不満から出た、抑えきれなかった行動と推測される。そんな夫も、一家が最悪の状況に陥ったとき求めて行くのは妻のふところで、彼はそこで憤怒の涙を流す。また、妻としての自らの名誉もかかっているからだとも考えられようが、Eyvind 殺しの機会が訪れたとき、Oddbjörg は夫を奮起させようとして言う、『この日をあなたは長いこと待っていたんでしょ』(p. 210)。彼女のライバル Åsa までが、皮肉まじりに認めている——『奥さんなしじゃ、あんたはちっともうまくやれないんだから』(p. 211)。

たしかに家族、使用人たち（＝家人、同じ世帯の構成員）を多く

抱える大規模な農場であればなお一層、その女主人は、自分たち夫婦、親子以外のことに関しても義務と責任が大きかった。例えば、Adalbol が不意打ちをかけられたとき Oddbjörg が屋敷の女子供を一個所に集めて敵からの保護を図ったように。(ちなみに、このとき彼女は使用人の女房からなじられる——『実際のところ、奥さんはあたしたちの身に降りかかったことに責任がないわけじゃないでしょ』(p. 152))。彼女はまた夫の死後、使用人頭とともに、未成年の息子の後見をする。

小さな人口のすべてが農村社会に生きてきたアイスランド的社會では、開闢このかた有閑マダムなど存在しない。この Oddbjörg もまた、少女時代から親しんできた家畜のことなら夫に負けない自信をもつ農村女性だ——「少なくとも毎年初夏に一ヶ月、彼女は子羊が大きくなるのを見たり、山羊や羊の乳を搾ったり、チーズ作りの鍋からである匂いや、牡山羊たちのむかつくような匂いを嗅いだりしたかったのだ。」(p. 55)。そして、その間は夫の代理として山の放牧場で使用人たちに指図し、仕事を監督した。そんな折、谷の屋敷で R の世話をするのが Åsa であった。

Oddbjörg の対極をなす妻にして主婦・女主人たる女性は、Åslög であろう。彼女は貞淑、賢明、勇気、思いやり、さらには健康という美德を備えもった、ほぼ理想の女性として描写されている。とりわけ彼女の決断力は夫 S の信じて頼りにするところである。

Torbjörn が援助を求めて S のもとに現れたとき、しぶる夫とは対照的に、Åslög は疲れた老人を見るとすぐに家の中に招じ入れて食事をさせる。夫は、相変わらず煮え切らない態度を取り続ける。「S は妻に目を向ける。彼女の目は青く、顔はそばかすだらけだ。彼女は静かに椅子に座っている。彼女は黙ったままでいる。彼女には安心感や決断力というものが大きいにあるように見える。彼女が生まれてから一度も恐れたことなどなかったというのは信じられそうだ。

『決定はおまえにまかす』と S は妻に言う。『おれが得られるものはおまえが得るのだ。おれが失うものはおまえが失うのだ』 Åslög が言う、『自分たちの子供がいないじゃありませんか、あなたと私には』 (p. 80).

妻の鼓舞にすぐには答えず、S はさらに時間をかけて思案する。そして最後に告げる——『おまえが何をしたがっているのか分かった』 (p. 81).

こうして、妻の意見と励ましを受けて、S はやがて大きな財産と権力を手に入れることになった。それとは逆に、彼女の強い勧めに従わなかったために、のちには富と力ばかりか、自己の名誉までも失うことになった（詳しくは § 2 末尾参照）。

小説全体の脈絡から、Åslög は妻として、また人間としてきわめて優れていると確信されるにも拘らず、彼女は、伝統的な男系社会に生きる女性として決定的な欠陥を負わされている。つまり、S によって子供、とくに血筋を絶やさないように息子を産むことができなかっことである。それを彼女自身は十分すぎるまでに意識している。妻の助力と S 自身の奮闘の結果、Åslög が新たに女主人として大農場 Adalbol に迎えられた夜、夫婦のベッドの中で夫に言う。『今度こそわたしたち、息子をもうけないといけませんね』 (p. 167).

彼女が最後まで子供を産めなかったのは、彼女自身に欠陥があつたためではないのかもしれない (cf.: Adalbol を取り戻したとき R が勝ち誇って S に浴びせた侮辱——『ついでに言えば、おまえは後を継いでくれる息子もつくれない男じゃないか。だから、こうなってもおまえにとって大した損害じゃないだろう』 (p. 238)).

夫の支持者、助言者として完全な女性として描かれた Åslög が主婦としても当然完全であるべきだと、一般的に結論できる。作者 Sundman も同様に考えたのだろう、主婦としての Åslög はほとんど描写していない。それでも、Adalbol の新たな女主人としてかいがい

しく働く Åslög の描写は、賢明で勤勉な主婦を連想させる。

6.4. 異性（恋人）としての女性：Åsa 対 Oddbjörg

『ソーム物語』は男女間の愛情あるいは情事を、まず R と若い羊番をめぐる、屋敷の女主人 Oddbjörg と使用人頭の娘 Åsa の対立という形で語っている。参考までに付け加えれば、このテーマはもともと『〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ』には見当らないものである。さらに、二人の女性が男性一人をめぐって能動的に関わるような三角関係は、サガ文学全体でも無きに等しい。（しかし、中年の夫婦と若い、しばしば独身の女性が演じるどろどろした愛憎劇がアイスランド、スウェーデン、そして日本を含めて、古今東西無数にあることは改めて言うまでもない。）

読者が Sundman の小説で初めて出会うとき、Oddbjörg は33才、Åsa は22～23才である（cf.：「彼女（=Åsa）は彼（=Einar）よりも5、6才上だった。」（p. 40））。すでに前項で触れたように、この女性たちは白夜の山の古い小屋で羊番の少年をめぐって恋（と呼ぶには余りに欲望まる出し）の鞘当てをする。Einar に初体験をさせてやった女性は Åsa である——『あんたはとにかく、イッちゃう前になんとかあなたのムスコを入れることが出来たじゃない』（p. 49）。（ついでながら、そのとき彼女は“夜明けのコーヒー”を飲みながら Einar に、彼の従兄 Eyvind とも関係したことがあると匂わしている。彼女とこの二人の従兄弟との関係は、彼女の愛人 R も別の場所で語っていることである。）そして、少年を横取りされたのを目の当たりにしたとき Åsa は言い放つ——『あんたなんか、あたしが始めたところから続きをしただけじゃないの！』（p. 60）。

この Åsa は、R 屋敷の使用人頭 Olof の娘である。母親については全く語られていないが、多分はやくから父と二人だけで R の農場で生い育ったものであろう。そして、父親の同意があったかなかっ

たかは想像の域を出ないが、Rが成熟してゆく使用人の娘に自分との関係を強制したと考えられる（ならば、彼女にとってRは最初のオトコであったろう）。それから二人の関係は他の使用人にも知れた半ば公然たるもので、Rの死によって途絶えるまで切れなかった。

Oddbjörg は Einar と同衾していたとき、もっとも認めたくない事実を夫の愛人 Åsa から突きつけられた——『あたしの方はね、この一年間、何度もあんたのRをこの脚の間にくわえてやったもんさ』さらに、駄目押しの追い打ちをかけられる——『あたし、あんたのこと分かる。あんたはチャンスに恵まれたら、そいつを掴み損ねないようにしなくっちゃ。あんたはね、もうオバサンになり始めてるんだからさ。もうすぐ舞台からご退場、そしたらあとは自分の指で楽しむしかないね』(p. 60)。

30才で“オバサン”呼ばわりは気の毒な気もするが、こうした感じは長寿社会に生きる読者の現代的意識と言えまい。たしかに今日、北欧諸国は日本などと並んで長寿を誇っているが、『ソーム物語』の底流に流れる精神が中世アイスランド的であるとき、別の解釈がより適切になろう。つまり、いまこの小説を中世に翻すならば、Oddbjörg をはじめとする人物たちは今日の我々よりもはるかに短命なはずである。そうすれば、30才はすでに人生の後半に含まれる年齢と認識され、この女主人も必然的に客観的＝絶対的に“オバサン”になる。しかし、もっとありそうなのは次の事実であろう。すなわち、若い未婚の女性はいつでもどこでも、自分よりも年上の同性を、後者が30才代の子持ちの女性ならほど例外なく、自分よりもずっと年上で生活臭を漂わせていると見なしがちなことである。この意識はいっそう主観的＝相対的であり、そしてしばしば Åsa の場合のように、この語を用いる側からは意図的に、底意をもって示される。

その Åsa が給仕をして、種馬 Frejfaxe [=Freyfaxi] が山から

疾走して主人のもとに帰って来たとき，Rが彼女に尋ねた．

『おまえ，ゆうべ馬に乗らなかったか』

『あたしはそんなこと，あんまりする気ないわ』と彼女は言う．
『でもあたしは，あんたがあたしが知っていると知っている以上に，知ってるんだ．それから，密かに燃えさかる愛情がいちばん熱いだろうって．それから，よく言われるよう，女ひとりを見張るよりも羊百頭を見張る方が楽だってことも』(p. 63).

このように一見悪女のÅsaだが，Rはますます彼女にのめり込んでゆく――

「彼は，使用人頭の娘Åsaといちばん寝た．

『あたしと子供つくる度胸ある？』

彼女は訊きながら，口元をゆがめて笑った．彼女の長い金髪が彼女の肩と胸にかかっていた．

『あるとも．しかし，脇腹の子供まで面倒みられん』」(p. 187).

Eyvindが帰国する夏，Rは44才，愛人は30才前後になっている．朝になって「Åsaはベッドで身を起こして胸を両腕で隠した．

『本当なら，あたしはあんたを殺すか，このRavnkelstaの屋敷を出ていくべきなんだけど』

R——『そんなこと，二つのどっちも，おまえはしないだろう』

『くやしいけど，あんたの言うとおりだわ』とÅsaが答えた．」(p. 189).

また，別の夜の寝物語でRがÅsaに，これまで何人の男と寝たのだと，いつもの“いじめ”を始めると，Åsaは本心を告白する．
『あんたがいちばんの男ね．どうしてなのか，はっきり分からぬけど．あんたのすることじゃなくって，あんたってひとが』(p. 193).

この夫と使用人の“小娘”の，自分の存在を無視した愛情生活，むしろ性関係に，Rの妻Oddbjörgは平静でいられるはずがない．周知のように，中世アイスランド的社會では，結婚は必ずしも男女

の愛情に基づく制度ではなかった。当該の男女がいわゆる名家に属すれば、ますます“政略結婚”が一般的となる。RとOddbjörgの結婚もそうだとは、サガでも小説でも言われていないが、Oddbjörgに関する引用から(cf. § 6.3)，この推論はもっとも自然である。10年以上連れ添って二人の息子を産み育て、女の盛りを過ぎた妻と、同じ敷地内を挑発的な姿で動き回る男好きのする若い娘——平均的な男性の選択は前もって明らかだ。ましてや、若いライバルが自分の夫との交渉で日毎に磨きがかかってゆくさまが手に取るように見えたなら（見えたはずだ）、屋敷の女主人とて愛情競争では初めから勝ち目はない。こうして、だんだん「Rの妻 Oddbjörg は独りで寝る」(p. 192)ことを余儀なくされたのだから、女主人という立場を利用して強引に若者と関係を結んだことは、生理的に、また心理的にもきわめて自然な成り行きと理解される。

このOddbjörgの婚外交渉は“不倫”をやめない夫と同じことをしただけと、共感や賛同されてよい行為と理解されるならば、それは勝れて現代的な——北欧にあっても非伝統的な——男女観であろう。この小説が前提にしている中世アイスランド的社會は男社會であるから、性に自由な女性は社会的に非難、糾弾されるほかない。張本人のRでさえ自分の愛人問題は棚上げにして、妻の不貞を責めている。彼はEinarに一撃を加えたとき、目撃者Gudrunに言いつける——『Oddbjörgに伝えてくれ、あいつは夏ずっと山に残っていていいってな』(p. 65)。彼がこう言えたのは、Frejfaxeが屋敷に戻って来た夜にÅsaが匂わしていたことばによる(cf.:『あんたは、自分の奥方がどこの馬乗りたちを乗せているのか、もっと考えなくっちゃね』。さらには、ことわざ『女ひとりを見張るよりも羊百頭を見張る方が楽だ』(p. 63))。

最後に、Rにとって女性とは何だろうか。おそらく彼は家政を仕切る名家出身の主婦（妻）と、寝室で有能な若い愛人（娼婦）の

二つの異なる役割を果たす女性たちが必要だったのではないか。彼は家系を継承する子孫をもうける生殖行為と日常の欲望を満たす手段としての性は欠かせないが、その前提としての愛は必ずしも必要としているように見える。彼はもともと、どんな女性でも選べる立場にもあった。さらにRは、例えばSとは違って、他人に頼らずあらゆるものを作りきれる強い性格の人間なのである。こんな中年男性を、密かに燃えさかるいちばん熱い愛情で愛した「Åsaは、Rの死んだ年の冬に死んだ。彼女がどんなふうに、またどうして死んだのか、だれも知らない。ある日、彼女はベッドに横になって、子供のように身体を丸めているのを見つけられた。」(p. 254)。いちばん最後のセンテンスには、報いられない愛に殉じた Åsaに対する作者の深い同情がにじみ出ている。

6.5. 親族としての女性：Åslög 対 Bjarne の妻

親族、血族の関係 (kinship) はアイスランドのみならず、すべての古い社会がもっとも重視した人間関係である。Sは、この人間の絆を両親がしたように無視できなかった（彼はそうしたかったはずだが、自分自身では決断できなかった）ため、その結果、惨めな晩年を迎えるに至った。彼にそうさせたのは、すでに見た通り、妻 Åslög の助言である。しかし、彼女のように親族関係を大切にすることは古い共同体ではすべてに優先させねばならない掟であり、鉄則であった。

Torbjörnは、Rに対する訴えを起こすために援助を求めて、まず兄 Bjarne のもとに出かけた。兄弟が話を始めたところに、兄の妻が玄関に出てきて、しばらく二人のやりとりに耳を傾けている。それから、「Bjarne の妻は口をすぼめる。彼女は兄弟の話が気にいらない。『Rに訴えを起こす動機のある人はいっぱいいるけど、みんな引っ込んでいるじゃありませんか』と彼女は言った。『その

多くは、あんた Torbjörn、それにあんた Bjarne、あんたら二人よりもずっと腕っぷしの強い連中ですよ』」(pp. 74-75)。

この義姉の説得力ある現実論に、Torbjörn の望みは打ち砕かれる。そして、これに勢いを得た実の兄 Bjarne は返答する、『わしは助けることができない。わしはそうしたいんだ。しかし、わしはできない。おまえはわしのことを分かってくれなくては』(p. 76)。

憤激した Torbjörn はその足で Bjarne の息子 S のもとにやって来る。このとき、女主人 Åslög は夫と違って彼を快く迎える。それまで頑くなかった老人の心は、和らいでゆく——

「『わしはすぐ帰っていくんじゃないんだ』と Torbjörn は言う。その時になってやっとジープのイグニッショնキーを回してエンジンを止め、Åslög について家のなかに入って行く。」(p. 79)。

老人は、質素な食事ながらもそれに招かれる。その時 Åslög は、すでに引用したことば——『自分たちの子供がいないじゃありませんか、あなたと私には』(p. 80) で、S の決心を促した。老人が疲れ切って居眠りをする頃に、

『わたしたちは何かしなければいけません』と Åslög が言う。

『Einar に加えられた斧の一撃は、あなたの頭をもかすったのですよ』(p. 81)。

のことばに、S は夫婦の床に入ったあともまだ迷っている。

「『決定をしたのはおれじゃない。おまえと Torbjörn 叔父がおれのためにそうしたんだ』

『それから、あなたと Einar がとても近親だということもあります』と Åslög が言った。『Torbjörn さんは無愛想なおじいさんだけど、わたしはあの人を自分の実の叔父さんにしたいくらいだわ。叔父さんはいま下の台所のソファでぐっすり眠っていますよ』」(p. 82)。

S は間違いなく両親の子である。つまり、自己の利益を最優先に

考えることと、家庭問題で最終決定権を妻に握られている事実を自ら承知している2点において。

6.6. 使用人としての女性：Gudrun 対 Åsa

Rの農場には女性使用人として、Åsa のほかに、夏季放牧場にいた3人が知られる。しかし、その中で名前を挙げられているのは、Gudrun ただ一人である。彼女は主人のRにも 彼の妻 Oddbjörg にも遠慮なくものが言える。彼女はRの“ばあや”，あるいは“ねえや”的存在であった。「彼女の名前は Gudrun といった。髪は白くて、とがったあごと、穏やかな明るい目をしていた」(p. 61)。

女主人はうかつにも羊番の床で朝まで寝込んでしまって、搾乳器のモーターの音に起こされて慌てて飛び出す。すると、「『奥さんはいつもと違う建物から出てきなすって』と三人の女の一人が言った。

『そんなことは忘れなさい』と Oddbjörg は答えた。
『思い出すのがむずかしいってこと、ときどきあります。忘れる方がもっとむずかしいことは、しおっちゅうですが』と女は言った。」(p. 58)。

Gudrun は山で羊番 Einar が Frejfaxe に鞍を置くのを見たときも、熱心に注意した。その制止を振り切って、羊番は禁じられた種馬に乗ったのだ。それを知ったRが山に来て Einar を斬り殺す直前のこと、「彼らふたりのところに例の三人の女がやって来た。

『あたしは親父さまの代に、ここで働きだしました』と Gudrun が言った。『そして、旦那さまがまだ歩くこともできないくらい小さかったころ、おまえさまといっしょに遊んだものです。おまえさまだってやっぱり体の中のどこかにきっと持つてなさるに違いない優しさを、そろそろお見せにならなくてはいけませんよ』」(p. 65)。

この老女の戒めに、当時のRは聴く耳を持たなかった。皮肉にも

彼女は集会の法廷で、S陣営から半ば拉致される形で殺人の目撃証言をさせられ、その結果、わが意に反して主人Rを非常な困難に追い込んでしまった。

Einar 殺害事件から7年目の夏、Eyvind 一行が早朝に Adalbol 目指してRの屋敷近くの川を渡って行く様子を、洗濯をしている屋敷の女たちが目にした。その一人が Gudrun だ——「『よけい見すぎるってのは、あたしの運命なんだね』(p. 208)。このあと、彼女は岸でサボっていた Åsa をRのもとに走らせる。見たのは Gudrun だと聞くと、『いつかの埋め合わせをしようってんだな、ばあさんは』とRは言って起き上がり、身支度をした。『あのはあさんは見まちがいをしない』」(p. 210)。

Rの屋敷でもっとも目につく女性は彼の使用人頭の娘 Åsa のはずだが、彼女は日常あまり働いている様子がない。そして、Rの食事の世話をするのが、小説の叙述から知られる唯一の仕事らしい仕事だ。それでも、「温室の一つから出てきた」(p. 40) と語られていることから、彼女がハウス栽培の仕事に携わっていたことも推測できる。しかし、主人に特別扱いされる愛人としてのプライドか、あるいは生来の高慢さのゆえか、他の女性使用人の間には入ってゆこうとしない。そして、いま上に見たように、洗濯女の仕事など彼女の品位にかかわると考えて、仕事をサボって煙草をふかしている。

この Åsa にはRしか見えない、Rしか聞こえないのだ。それをRは理解できず、ただうるさがった——『おまえは聞きすぎる。それから、見すぎる』『おまえはまた喋りすぎる』(p. 73)。彼女自身もRも、彼女が屋敷にいるのはなにも女中仕事のためでないことを承知していた。彼女は真に報われることのないRへの愛情だけのために生きている。だから、彼の言いつけならどんな仕事でもすんで、そして落ち度なくやりおおす。例えば、Eyvind 襲撃の加勢を招集するとき、彼女はRから、何人、また誰を集めるべきかの

判断をまかされて、この重要な用事を首尾よく果たした。彼女はだれかれの命令や強制に従順に従う人間でなかっただけだ。

7. おわりに

サガを読む機会のなかった読者が Sundman の小説を読んだとき、おそらく第一に次のような疑問を抱くのではなかろうか。なぜ作者は中世的物語を現代を舞台に展開しようとしたのか、なぜ現代に生きる人間がなんの違和感を抱くこともなく中世的な仇討ちに自己のすべてを危険にさらし得るのか。なぜ彼らが司法や警察という公的権力がまったく存在しない社会をもち得るのか（cf.:『他の国には検察というものがある。他の国には警官もいるし刑務所もある。しかし、おれたちはここに、この国に生きているんだ』(p. 79)）。そして、そのような物語を展開する作者の技法にも無条件で納得できないだろう——たとえ作者自身が、中世の諸規則が「今日でも、西欧的な特徴をもつ体系化のなかに辛うじて隠蔽されて、他の諸国にも存在している」（原作表紙カバー）と解説しても。おそらくその辺の不自然さ、無理押しに批判のもとがある（cf. Warme: 162）。そして、本稿の筆者が冒頭に述べた感慨のもともそこにある。あるいは、Sundman 自身もその“不自然さ”は承知していたのではない（cf. Warme: 201, note 2）。

中世サガの現代小説化ともいえる彼の文学的発想そのものは興味深く、その具体化のテクニックも巧みと言える——本来映画化を目的にしたためだろうが、いかにも映像に仕立て上げるのにふさわしい動きのある道具類と筋になっている。しかし、それと同時に、物語全体が現実感に乏しい印象も否めない。この感じは、ちょうど近未来小説や同種の映像作品から受けるものになぞらえられるかもしれない。つまり、後者における現代を中世に、未来を現代に移し替えればいい。ならば、けっこう娯楽物としては楽しめるだろう。

しかし、冒頭に指摘した“並立”，あるいは“相互分離”を黙認して Sundman の小説を満喫しようとするならば、やはり中世アイスランドのサガ自体をあらかじめ知っておくことが望ましい。そうすれば読者は、作者自身が言うことば、すなわち「私はこの小説で、現代のスウェーデン語作家がいかに、きわめて古い北欧の物語伝統のなかで容易に創作できるかを示したい」（原作表紙カバー）を検証できるはずだ。そうした後に我々は、『ソーム物語』が単なる翻訳、翻案などではなく、第一に現代小説であることを理解するだろう。

さて、このサガと小説の両方を合わせ読んだとき、Sundman が一層くわしく描写した人物たちと、新たに創造した人物たち、とりわけ男性たちに勝るとも劣らないウェイトを占めている女性たちから、読者が改めて深い印象を受けることに疑いはない。そして、Sundman が男性たちのそれと対比的な性格を与えた女性たちが生氣あふれる存在であることを認めるだろう。

Einar の母に具現化しているのは疑いもなく、時間と空間を超越した永遠の母親像である。一方、30才代を生きる権力者の妻 Oddbjörg は、模範的な妻にして主婦 Åslög と、一見多情な若い女性 Åsa との中間にあって、不実な夫から独立することもできず、さりとて諦めの境地にも至らず、人間的な煩惱に苦しんでいる。しかし、苦悩は彼女一人だけのものではない。Åslög は妻として夫の後継者となる子供を産むことができない。また、Åsa は青春を“捧げて”妻子ある男性を一途に愛してきたにも拘らず、その相手から振り向きもされない。そして、その渴きを若い男たちとの戯れで癒そうとした。しかし、戯れはいかに真剣に追求しても、所詮戯れにすぎない。

最後に、血族意識、忠義のような倫理を尊重する Åslög、あるいは Gudrun が共同体に所属して前近代的とされるならば、自己の安寧・利害あるいは感情を最優先させる Bjarne の妻や Åsa は近代的といえよう。この二種類の中間に位置するのが、Oddbjörg であ

る。総体的に本稿で、一見肯定的に分析された女性たちは中世アイスランド的な心情を表わし、これに対して否定的、あるいは批判的に見られた女性たちは、近代ヨーロッパの個人主義的な女性の心理、行動を体現している。

(1990-08-30)

Some Remarks on *Berättelsen om Såm* by Per Olof Sundman
—Women and their significances in a modern Swedish “version”
of the old Icelandic story *Hrafnkels saga Freysgoða*—

Kunishiro Sugawara

Summary

In 1977 the Swedish author Per Olof Sundman (1922-) published a novel, *Berättelsen om Såm* (The Story of Såm), two years after being elected a member of the Swedish Academy. Long before he had hit on the idea to make a TV film of *Hrafnkels saga Freysgoða*, according to his own words printed on the jacket of his book. The Saga of Hrafnkell Frey's-Priest, which was written down in the middle of the 13th century, describes manslaughter and feud that supposedly took place in 10th-century pre-Christian Iceland. The Swedish author says, “I had to ‘translate’ the story into our days.” He continues: “It became necessary for me to create and name new characters. Specially important was it to underline the role the women play.” Accordingly, he transposed the 700-year-old saga to modern times with highly advanced technology.

In the novel one will find this modern civilization side by side with the social institution and ethics which had dominated the ancient Icelanders.

As every reader easily sees, Sundman's novel assigned more important roles to the women than they have in the original saga, and those new female characters he has created have a decisive influence on the development of the story. Indeed, as Warme (1984: 167) puts it, the women could be seen as the prime movers in the drama, and with this distinction Sundman has turned the saga from a story of men into that of women, as I express it. It is these women that I have attempted to analyze in this article from various points of view, incessantly with the old Icelandic masterpiece in my mind.

For the reader unfamiliar with Old Nordic literature, I have given a rather detailed outline of the Saga of Hrafnkell (§ 2). Sundman maintains that in his novel he has tried to follow the principal lines of the saga. Thanks to it, it is actually unnecessary for me to outline the contents of his work. Here I have divided the main female characters into the categories *i.e.* women as mother: Einar's mother (§ 6.2), women as wife/mistress: Åslög *vs.* Oddbjörg (§ 6.3), women as lover: Åsa *vs.* Oddbjörg (§ 6.4), women as kinsfolk: Åslög *vs.* Bjarne's wife (§ 6.5) and women as servant: Gudrun *vs.* Åsa (§ 6.6). My criteria are apparently ancient Icelandic, in accordance with Sundman's supposed intention of writing his novel.

Among the female characters Sundman describes in his novel, it is only Gudrun whose presence you can detect in the old saga as a washing servant-maid, whose role is shared by Oddbjörg in the novel when she provokes her husband to attack the near-by passing Eyvind, their potential enemy.

Gudrun, who is faithful to her master, and Åslög, who respects bonds between man and woman and among kinsfolk, personify ancient Icelandic sentiments, while Åsa and the wife of Bjarne are modern European, independent souls for whom private welfare and their own feelings come before anything else. Ravnkel's wife Oddbjörg is an intermediate between these two categories of women.

As a conclusion we may say as follows (see § 8):

Sundman's literary idea to turn a medieval saga into a modern novel is highly interesting, and his device to realize this idea is also ingenious. But there is no getting around the impression that the story as a whole lacks reality. This impression can be compared to one that science fiction will make on us. The difficulty which remains unsolved is the unnaturalness which we find in Sundman's description of his too fictitious pseudo-modern society with advanced technology on one side and blood revenge on the other. After all, this Story of Såm is no translation nor adaptation of the Saga of Hrafnkell, but an original novel by P. O. Sundman himself, who with his novel wanted "to show how a Swedish author today can quite easily work in a very old Nordic story-telling tradition."

作 品 (原作と翻訳)

- Hrafnkels saga Freysgoða.* Udgivet af Jón Helgason. 3. udgave
3. oplag. København. Ejnar Munksgaard. 1964. xii+53p.
(= Nordisk filologi A: Tekster, 2. bind.)
- Sundman, Per Olof. 1977. *Berättelsen om Såm.* Stockholm. P. A. Norstedts & Söners Förlag. 254p.
- . 1978. *Sagan um Sám.* Eiríkur Hreinn Finnbogason íslenskaði. Reykjavík. Almenna Bókafélagið. 277p.
- 菅原邦城 1987. 「〈フレイ神ゴジ〉 フラヴァンケルのサガ」(改訳1・2),『大阪外国語大学学報』第73号, 53-67; 第74号, 121-131.
- 山室静 1974. 「フレイの神官ラブンケルのサガ」,『赤毛のエリク記』, 111-150. 冬樹社.

参 考 文 献

- Eriksson, Dixie et al. 1986. *Författare i vår tid. 164 porträtt i text och bild.* Stockholm. Natur och Kultur.
- Kristjánsson, Jónas. 1988. *Eddas and Sagas. Iceland's Medieval Literature.* Translated by Peter Foote. Reykjavík. Hið íslenska bókmenntafélag.
- Lönnroth, Lars & Göransson, Sverker (red.). 1990. *Den svenska litteraturen. Mediedåterns litteratur 1950-1985.* Stockholm. Bonniers.
- Olsson, Bernt & Algulin, Ingemar. 1987. *Litteraturens historia i Sverige.* Stockholm. Norstedts Förlag.
- Warme, Lars G. 1984. *Per Olof Sundman. Writer of the North.* Westport, Connecticut · London, England. Greenwood Press.
(= Contributions to the Study of World Literature, Number 7.)